

令和8年度  
社会人選抜(A日程)  
文化学科  
[文化総合系(夜間主コース)]  
小論文  
問題・出題の意図・採点評価基準

令和7年11月23日

高知県立大学

問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（配点 100点）

感想文とは「生活の中の直接の体験や、自己の見聞、読書、視聴したことについて、自分の感じたこと、思ったことを書き表した文章」だと定義されている。感想文を書かせる目的は、「生活の中で経験する事象をよくみつめ、判断し、感じたり考えたりしたことをまとめて表現する能力を養う」こと、それは最終的に「事象に対する認識力、判断力、思考力、洞察力、想像力、感受性を高める」ことにつながると作文の指導書で述べられている。感想文は、認知・思考・感性・態度の全方位的な能力の育成を目指していることが分かる。

この定義が示すように、日本の初等教育・中等教育において「感想文」は極めて多様なことがらを対象に日常的に書かれている。たとえば、日本の作文の定番となっている、本の読後感を書く「読書感想文」と、修学旅行や運動会などの特別活動が行われた後に書く「行事感想文」（卒業文集もこれに含まれる）、社会見学や体験学習などを行った後の「見学感想文」、見学の対象が美術館や映画などの場合の「芸術鑑賞感想文」、各教科でひとまとまりの学習が終わった際に何を学んだかを書く「学習感想文」、与えられた課題を調べて感想を述べる「調べ読み感想文」、学校生活、家庭生活、社会生活について与えられた課題で書く「感想文」がある。これらの名称が示すように、基本的にあらゆる対象を扱う、日本の学校教育における「書き方の基本型」であり「万能の書く様式」となっている。それだけに、目的が明確にされず教師の漠然とした指示によってかなりの頻度で書かれているという課題も指摘されている。

このように、書く対象によって様々な名称がつけられている感想文だが、書く様式としては共通の型がある。序論で書く対象の背景と書き手が対象に対して持っていた感想（理解・知識・考え・感情）を書き、本論で対象を通した書き手の体験を述べ、結論で体験後の感想を述べる三部構造である。体験の前後での書き手の気持ちや考えの変化を感想という形で述べさせる根底には、体験を通して何を学んだのかを書く、つまり体験を通した自己の成長の軌跡を描かせ、その体験を今後どう自己の行為や生き方に生かすのかを考えさせる目的がある。読書感想文はその典型であり、読書によって書き手のものの見方や考え方がどう変わったのかが感動をもって書かれており、それが読み手に伝われば読書感想文は成功である。

ここで感想そのものの質を保証するのが「当事者性と切実性」をもって書くこと、つまり「自分の生活や生き方とどう関わるのか」という視点を持つことである。それがないと平板な作文になりやすい。構成においても、本の内容や体験の一部始終をただらと書いたり、見聞きしたことを網羅して、それぞれについて感想を述べたりする網羅型にはしないで、「自分との関わり」と「自己の変化」という視点から焦点を絞って三部構成で書くことが重要だと指摘されている。

このように体験を切り取ってひとつのストーリーとして構成するには、〈起—承—転—

結）が効果的で、特に〈転〉の部分で驚きが表現されると書き手の変化が伝わりやすい。もともと漢詩の構成法として日本に伝わった〈起―承―転―結〉は、物語のレトリックだと受けとめられているが、日本語による多様な語りを構造化する唯一の組織原理であるとされ、感想文にも効果的である。感想文の目的は自己の成長を物語ることなので、どのような題材・主題を扱っても展開的記述となりやすい。そうした展開の記述に変化をつける役割を果たすのも〈起―承―転―結〉である。四コマ漫画はこの型の典型例である。

（中略）

個人の認知・思考・感性・態度の成長を描く感想文には別の機能があり、それは学校で感想文を書く実践の中に見つけることができる。学習の成果を自己の成長の結果として表現する時、書き手のものの見方や考え方を変化させるのに他者の力を借りることが重視されている。なぜ他者が重要なのかといえ、他者の多様な考えや価値観に触れることが自己の見方・価値観を考え直す機会を与えるからである。

たとえば国語では、学級全体でテキストの読解を行い、それぞれの読み取りを発表させて多様な見方・考え方があることに触れさせる。そのために、答えが一義的（ひとつ）に決まらない主人公の意図を問う質問がよく投げかけられる。主人公の意図を読み解く手がかりとして、主人公の言動とともに場の状況や自然の描写に注目させ、主人公になりきって考える方法が採用されている。主人公の意図の解釈には、解釈する者の価値観が反映されやすく、解釈に紐づいた児童生徒たちの多様な価値観が示されるからである。とりわけ初等教育の読解では、読みの正解を得ることよりも、多様な価値観について意見を言い合うことで、教室という小さな共同体に参加させることをより重視している。読解の授業は、多様な子どもが集まる教室を「相互無関心」を許さず、「協力と相互交換」を迫る空間にする」と小学校の授業分析を行った埜寄志保は指摘している。

国語教育における文学の取り扱いを歴史的に分析した幸田国広によれば、かつて文学の鑑賞によって行われた人間形成は、1980年代以降物語の「正しい読み」を目的とする「読解」に重点が移ることで、「登場人物の心情の変化を場面の展開に即して読み取る授業が一般化し」、この定型化された正しい読みの方法と徳目が結びつくことで国語教育は「「隠れた道徳教育」を内に抱え込」むことになったという。なぜ「隠れた」道徳教育なのか。それは、登場人物の状況に身をおいて気持ちを察すること、つまりひたすら登場人物に共感する一方で、善悪の基準や行動規範は、教師によって明示されないからである。それは児童生徒が読みの共同作業の中で個人的につかみ取り、感想文で表明するものである。学級での読みの体験を自己の体験に関連づけて感想文を書くことにより、解釈の共同作業は再び個人に投げ返されて深化を遂げる。しかもこの変化は二度起こることが期待されている。お互いの意見を聞き合って異同を確認してから感想文を書かせ、書いた感想文を発表させて友だちの作品との異同についてさらに考えさせるのである。

出典：渡邊雅子『論理的思考とは何か』岩波書店、2024年  
（出題の都合上、出典の文章を一部省略・改変した。）

注：

- 初等教育 初歩的、基本的な普通教育を内容とする、小学校教育。  
中等教育 初等教育と高等教育の間における教育。六・三・三制においては、三・三に  
当たる中学校・高等学校の教育をいう。  
埜寄志保 日本の教育学者。専門は教育方法学。  
幸田国広 日本の教育学者。専門は国語教育学。

問1 筆者は、感想文の機能についてどのように述べていますか。本文の内容に即して300  
字以内の日本語で説明しなさい。

（配点 50点）

問2 あなたは、感想文の意義と問題点についてどのように考えますか。具体例をあげなが  
ら300字以内の日本語で述べなさい。

（配点 50点）

<出題の意図>

- 問1 感想文を書くことについて書かれた課題文を、正確に読み取ることができている  
かどうかを見る。  
問2 課題文の内容を踏まえ、感想文の意義と問題点について適切な例をあげながら、自  
分の考えを論理的に記述する能力を見る。

<採点評価基準>

- 問1 次の点を見て評価する。  
（1）課題文の内容を、正確に理解することができるか（読解力）。  
（2）筆者の考えを、適切な文章で表現できているか（文章表現力）。  
問2 次の点を見て評価する。  
（1）課題文の理解に基づいて、適切な例をあげながら論述できているか（読解力、知識・  
理解力）。  
（2）自分の考えを、論理的かつ的確に表現することができるか（論理的思考力、文  
章表現力）。